

米国に於ける日本人留学生のIES経験の分析

中林真佐男、鈴木佐紀子、久間利昭

1、まえがき

Communicative English に関する日本人学生の平均的な能力は低く、さらに日本人のTOEFL スコアは諸外国と比べても大変低い。(表1)

この研究では、米国に留学してIES (Intensive English Program) を受講した学生のTOEFLスコアと、日本に留まった学生のものと比較し分析してみた。データ分析から得られた結果にもとずき、いくつかの推計的数値が判明し、このような現状を改善するためにいくつかの提言を行ないたい。

2、目的と研究の仮説

この研究の目的はつぎの仮説を実証することである。「留学した日本人学生の経験は日本に留まったグループと比べ彼らの英語の熟達度に大きな差をつくるだろう。彼らの言語経験、即ち学習目標とする言語のinputの量は後者と比べ遥に多いからである。」

3、方法 (Method)

Subject:

調査の対象は1992年と1993年にTOEFLを受験したK大学の学部、短期大学部の学生47名である。1992年度は、米国のL大学のIESプログラムの留学生として14名選考され、1セミスター(3、6ヶ月)の語学留学を行なった。同時に、11名の学生がTOEFLを受験したが、留学できなかった。前者を実験グループとし、後者をコントロールグループとした。1993年度についても同じ推計作業を行なった。

Instruments:

主な信頼数値としてTOEFLスコアを使い、二次的な比較対照資料として実験グループに課した帰国報告書を参照した。

Procedure:

各グループの学生はTOEFLを2回受験している。IESグループは選考前(pre-test)と帰国後(post-test)である。日本に留まった学生もほぼ同じ時期に受験している。このIESプログラムの前後に受験したTOEFLスコアを比較するために、データ分析に2つの独立グループの為のt-testを利用した。

9月23日(月) 研究発表第4室(1205)

4、結果 (表2)

1992年と1993年の傾向は必ずしも一致していないが、1993年度の結果より米国での経験はlistening能力を高めることが証明された。例えば、1992年の実験グループ(14名)のTOEFLスコアのlisteningでは、Pre-test 平均値48.2、標準偏差1.9、Post-testの平均値52.7、標準偏差3.5で、pre-testとpost-testの得点に有意差($t=5.80, p<.01$)があった。grammarとreadingの得点に関しては殆ど同じで、有意差は認められなかった。この結果は、仮説を支持するものと解釈される。

5、結論と討議

- (1) コントロールグループと実験グループの間に、留学前と後では明らかな差があり、特にlistening能力に顕著に現われる。しかし、grammar, readingに差にないことは短期間なので効果の測定はできないようである。
- (2) writing能力については本研究からは測定できなかったが、留学することは学習者の動機づけになっている。学生は目標言語に対してstrategyをはっきり持っていて、総合的に学習効果につながっている。
- (3) EFL (English as a foreign language) を学習する学生と ESL (English as a second language) を学習する学生は異なる環境で語学力を改善しているようである。従って、EFLとESLを学習する学生に対して、それぞれ不足した部分を補正する教育を実施することを提言したいと思う。